



サントリー学芸賞授賞式に出席する中西嘉宏さん(左)と川瀬慈准教授(右)ら受賞者(東京都内)

京都大の中西嘉宏准教授がミャンマーの難民問題の歴史と現実を考察した『ロヒンギャ危機—民族浄化の真相』(中公新書)と、アフリカで音楽を職能とする人々の生きざまを記録した国立民族学博物館の川瀬慈准教授の『エチオピア高原の吟遊詩人 うたに生きる者たち』(音楽之友社)が「第43回サントリー学芸賞」を受賞した。著作はともに「ドキュメンタリー映

像を見ているかのよう」「そこに生きる人々が活写されている」と各方面から評価されている。大学院時代、「アウトローの『けったいな』研究も寛大にサポートしてくれる雰囲気があった」という京都大アジア・アフリカ地域研究研究科で同期として学んだ気鋭の2人。さらなる学究フィールドの深化や研究成果の発表に意欲をのぞかせる。(佐久間卓也)

## サントリー学芸賞に京大ゆかり2氏の著作

2017年8月、ミャンマー北部のラカイン州で武装勢力が警察を襲撃したのをきっかけに、国軍がイスラム系少数民族ロヒンギャの掃討作戦を行い、わずか4カ月間に隣国のバングラデシュに約70万人もの難民が流出した。国際的な人権問題として批判される一方で、民主化運動や政変に揺れる国(何)が起ったのか、その実態は見えにくい。長年、ミャンマーの政治経済や文化を研究してきた中西さんは著書でさまざまな報告書の分析や現地での聞き取り調査を基に、危機の実相を浮かべた。

### 「ロヒンギャ危機」

京都大・中西嘉宏准教授



を分析。その上で、国家による排除と管理の強化が進む一方、民政移管が人々の自由をもたらす、宗教対立の激化など新たな紛争を生み出していったミャンマーの社会構造を読み解いた。圧巻は、ロヒンギャ武装勢力の襲撃事件や軍の掃討作戦でいったい何が起ったのかを探る第4章だ。人道的な立場に立脚しながらも、国連側や政府側など対立するさまざまな報告書を比較検証し、軍人や政治家、NGO関係者にも聞き取り調査して事件の真相に迫る。客観的で透徹した視点は「ドキュメンタリー映像を見ているかのような筆致」とも評される。「軍であらうが、民主化勢力であろうが、その立場になった時に世界がどう見えるか。現場でどういう緊張関係があったのか、紛争研究として自分が調べてきたことと合わせて可能な限り再現しよう」と試みた。



「ロヒンギャ危機は単純な善悪の構図だけでは理解できない。難民問題はアフガニスタンなど世界に広がっている。日本や各国の人道支援は喫緊の課題だ」と語る中西さん(京都市左京区・京都大アジア・アフリカ地域研究研究科)

# 善悪の構図超え客観的分析 音楽職能集団の営みを活写

### 「エチオピア高原の吟遊詩人」

国立民族学博物館・川瀬慈准教授



「映像も観察型、参加型、解説型と研究対象によって変えてきた。アカデミックな論述方法がしっくりくる対象もあるが、血湧き肉躍るネタや人間の豊かな相互行為をダイナミックに語るにはほかにもいろいろやり方があるのではないかと語る。著書でも、日本の昭和時代の流しのギター弾きやアコーディオン弾きを想起させるアスマリが酒場で聴衆に歌いかけ、名前や性格など情報聞き出した、即興で歌に取り込んだりする人間味あるコミューニケーションの情景が浮かび上がる。ミュージシャンを志していた大学



「吟遊詩人の映像作品を海外で上映するとエチオピア関係者から『国の汚い部分を写す』と批判されたが、今は伝統文化の担い手として認められてきた」と語る川瀬さん(大阪府吹田市・国立民族学博物館)

### 「距離感を自覚し」共同体に溶け込む

エチオピアの伝統音楽は世界的にも人気になったが、国内は内戦による政情不安が続く。「迷彩服を着て武器を持つような音楽家も増えていて、コンサートで文化芸術を起点に和平を呼びかけていくという動きも根強い」という。庶民の代弁者として政治ネタなども歌ってきたアスマリも旅芸人的な存在から都市への定着が進み、若い世代も文化の継承が困難になっており、「家が先祖のアスマリになっておいて、今後もさまざまなメディアを多元的に組み合わせ、文化や経験を表現したい。詩や小説も書いていきたい」と力を込める。

かわせ・いつし 1977年岐阜県生まれ。京大大学院・アフリカ地域研究研究科博士課程修了。国立民族学博物館准教授。専門は映像人類学。著書に『サントリーの精華たち』など。2014〜16年、京都新聞夕刊「現代のこぼれ」執筆メンバー。

### 「民意も複雑」対立意見など比較検証

本質は理解できない」と説く。2021年1月に刊行され、その後オーストラリアが起ったが、中西さんの研究成果は、ミャンマーの現状や今後を理解するのに大きな示唆を与えてくれる。「ロヒンギャ問題とミャンマー情勢、それぞれについてなるべくバランスのとれた見方を社会に提供できれば、1988年の民主化運動からスタート政権の誕生やこの政変までのミャンマーの姿を本にまとめた。スナチ中心ではない新たな民主化運動が出てこないかぎり軍の支配は続く。未来を見通すためにもこの30〜40年を総括する必要がある」と語る。大学院で同期として学んだ川瀬さんについては「映像人類学は、大学院時代から面白い試みだらけでうらやましく眺めていた。学問の権威や方法の多様化のスピードはますます、自分でも古きことをしているだけではないのかと不安になることもある。川瀬さんの仕事を見ると、とても自由で、自分も不安を感じている暇があるのか挑戦したい方がいると思わせる。これからも堅苦しい枠に縛られない仕事を続けてほしい」とエールを送る。